

# ジョヴァンニ・ディ・パオロ「天地創造と楽園追放（1445年）」の読解的鑑賞 — 6段階鑑賞法の提案 —

Appreciating Giovanni di Paolo's "The Creation of the World and the Expulsion from Paradise (1445)" by  
Reading-Oriented Approach: A Suggestion of the Six-Stage Method of Art Appreciation

信州大学 岡田 匡史

## I 序

鑑賞教育を扱う本稿の考察主題は、解釈（熟考的パート）を柱に組み立てる「読解的鑑賞<sup>1)</sup>」である（詳細は後述）。好きか嫌い（よかったか否か）で進める印象本位の受身的な鑑賞から、作品から感じ取り、読み取り、作品に働き掛ける能動的な鑑賞の一形態を提案する。そして、ただコンセプトを論述するだけでなく、筆者自身の指導や授業参観の経験<sup>2)</sup>に基づく、具体的な方法・プログラムも示す。本稿では、「6段階鑑賞法」について、ジョヴァンニ・ディ・パオロ (Giovanni di Paolo) 「天地創造と楽園追放 (1445年)」<sup>3)</sup> を例に挙げ、概説したい（本作選択理由はIV章参照）。

当指導メソッドの実施を想定する、主たる年齢対象は、知的関心・観察力・客観的分析力・論理的思考力等の増す13～15歳辺り、即ち、中学生とする。そう考える根拠は、アビゲイル・ハウゼン (Abigail C. Housen)、マイケル・パーソンズ (Michael J. Parsons) の研究にある。両者は、鑑賞能力 (美的感受性) の発達の側面を探り、共に5段階に整理した<sup>4)</sup>。その第3・4段階 (表1・2) が、中学校の時期に該当すると、筆者は読み取る。石崎和宏・王文純 (Wang Wen-cun) が、「Parsonsは、感情的志向 (第3段階) から形式アプローチ (第4段階) への変化を仮定しているが、Housenは、知的理解 (第3段階) から感情的経験 (第4段階) への変化を仮定している」<sup>6)</sup> と指摘する通り、2人の第3・4段階には内容的顛倒が認められるが、ここを中学校段階の発達特性として一括りに理解した。

表1 A. C. ハウゼン説 (石崎和宏・王文純「美的感受性の発達に関する基礎的研究—先行研究資料の批判的検討」p.7. より転載)

- ③分類の段階 (classifying stage): 作家、流派、スタイル、時代などに関心が向けられ、作品に直接的、客観的に対峙する姿勢がみられる。特に線、色、構成などの形式的要素を手がかりに、判断基準を形成するが、絵画の意味や作家の意図は理解されない。また、感情や嗜好は、知的な判断によって隠される。
- ④解釈的段階 (interpretive stage): 前段階ほどは事実上忠実に客観性を目的とせず、作品に対する個人的な解釈に関心が向けられる。作品と自己との相互作用に注目し、形式的要素ではなく、シンボルを解釈し、よりいっそう意味的なメッセージを探求する。独特なもの、情緒的なものへの関心が強く、感情的な言葉で表現される。

表2 M. J. パーソンズ説 (岡田匡史・高山顕光「鑑賞教育」の基礎研究 (H8年度) II—「美術科教育演習 (前期)」の活動報告と2つの鑑賞題材」<sup>5)</sup> p.12. より転載)

- 第3段階 - 表出力 (expressiveness)  
画家の写実描画の腕前よりも、真実を希求するアーティストックな態度の方に惹かれる。絵に備わる表現特質を、作者の心理状態や感情表出や美的感覚の働き、表現の動機・意図や主題面の独自性等に結びつけて理解しようとする。その解釈行為は内省的・感情移入的で、主観的範疇を出ない。
- 第4段階 - 様式とフォルム (style and form)  
観念の表明や喚情的表現を成立させる絵画の形式的要素 (物質的事実) であり、かつ、誰もが知覚し講評しうる客観的対象である。「媒体、フォルム、様式」に対して眼が開き、絵画理解の新たな問題意識をもつ。この転回から、個人的解釈を離れ、公的空間の中で絵が語られ論議されてきた歴史、その過程で生まれてきた多種多様な解釈・評価を、意義あるものとして意識します。美術史や批評言説の知識を作品解釈に有益に活用できるようになり、視野が広がる。

## II 言語活動の充実 (第6節美術の改訂)

『中学校学習指導要領』が10年振りの改訂となり、第6節美術も改められ、平成24年度には移行措置期間を終えて全面実施となる。改訂趣旨の1つに、中央教育審議会 (以下、中教審と略記) が、「各教科等を貫く重要な改善の視点」<sup>7)</sup> として『答申』に挙げた、「言語活動の充実」がある。『答申』は、国語 (言語能力 [筆者補記]) を、「知的活動 (論理や思考)」<sup>8)</sup> に加え、「コミュニケーションや感性・情緒の基盤」<sup>9)</sup> と解釈する。その観点から、改訂により重点化されたのが、鑑賞である。

ただ、美術作品だと、鑑賞は感覚的受容 (見て感じる鑑賞) が一番本質的と解されることが多い。その場合、印象が鍵を握る。しかし、改訂で求められたのは、見て感じることは大前提としつつも、言語を介する解釈を重視した思考本位の受容 (考え解する鑑賞) で、この場合、核となるのは書く・話すを主体とした記述・説明・批評等の言語活動である。第6節美術のB鑑賞の記載中、言語能力重視の考え方が最も前面に出る箇所 (中教審が例示<sup>10)</sup>) を、図1に抜萃し、併せて〔第1学年〕の当該箇所も引く (図2)。

- (1)美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう活動を通して、鑑賞に関する次の事項を指導する。  
ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能との調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと。

図1 『中学校学習指導要領』第6節美術「第2各学年の目標及び内容」〔第2学年及び第3学年〕2内容B鑑賞

- (1)美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう活動を通して、鑑賞に関する次の事項を指導する。  
ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。

図2 『中学校学習指導要領』第6節美術「第2各学年の目標及び内容」〔第1学年〕2内容B鑑賞

印象 vs. 言語、言い換えると、感性 vs. 理屈は、美術鑑賞で一般に認められる対立図式ではあるが、改訂内容は、vs. の後者を推す形となった。関連する見解を、史実を探り、図像解釈学的な知見を縦横に駆使して絵を読み解く、若桑みどりが『絵画を読む』に示す。若桑は、日本の美術ジャーナリズムに潜む、理屈 (学問臭) を嫌がり、感性的体験を専ら尊ぶ、言うなれば自由を感じることに至上主義の風潮に批判的である。若桑はこう記す。美術作品とは、「人間のもつあらゆる能力や技術や経済的關係」<sup>11)</sup> が創り出したもので、「鑑賞者も知性や知識や洞察力を働かせ」<sup>12)</sup>、それを理解しようとするのは当然で、このことは欧米では常識となる<sup>13)</sup>。だから、欧米の中・高は、「美術史」の正課を置く。さらに若桑は、画

家が固有な思考形式（「イメージによる思考」<sup>14)</sup>）で描く絵の理解には、画面と思想（の知識）を接続する観察と直観が要り、知性と感性の協働が求められると説く。筆者も同意見である。改訂趣旨もこの立脚点を共有すると解せ、読解的鑑賞もここに位置付く。

### Ⅲ 読解的鑑賞と絵を読む 4 視点

本稿で扱う読解的鑑賞は、形と色彩でイメージを紡ぐ絵を鑑賞対象とする。彫刻も可能だが、実材（物質）で成る三次元の彫刻は、絵に比べ物理的・化学的制約が多く、また、材料と技法（組立て方）の相互作用の中で、イメージが広がり限られもする点で、絵と同列視するのは難しい。日用品（応用芸術系）も可能だが、目的・用途・機能を探る使用的観点や、材料なら材質特性という単一的観点でなく、その価値を調べる複眼的評価軸（資源・環境・健康・安全・コスト等）の導入が求められるため、絵と同様には行かない。汲みうる内容は多様でも、1枚の宗教画と1脚の椅子は、読解次元が異なる。

したがって、本稿では、「絵を読む（reading a/of painting）」を中心に据える鑑賞の指導メソッドを論じる。

「読む（read）」という語は、英語圏では意味が広い。一般の語意と共に、読解的鑑賞と密接な他5つを表3に示す<sup>15)</sup>。読解的鑑賞では、学ぶ意義を有す、こうした深く広い「読む」を射程に納める。

加えて、「読む視点」としては、「日常的・想像的・文脈的・解読的」<sup>16)</sup>の4つを筆者は考える。表4に4視点を略記する。読解的鑑賞では、4視点が相補う形で読解が進むこととなる。

表3 “read”の語意（出典：『Webster's New Collegiate Dictionary』）

イ) to understand the meaning of (written or printed matter) （書かれ、また、印刷されたこと）の意味を理解する
ロ) to learn from what one has seen or found in writing or printing 書かれ、また、印刷されたことの中に見たことや発見したことから学ぶ
ハ) to become acquainted with or look over the contents (as a book) 中身に精通する、また、中身を（本を読むごとく）詳しく調べる
ニ) to make a study of ～を研究する
ホ) to interpret the meaning or significance of ～の意味や意義（深奥に潜む何か）を解釈する
ヘ) to learn the nature of by observing outward expression or signs 外部に向けられた表現や記号の観察により、～の特徴（本質）を学ぶ

表4 絵を読む4視点（岡田匡史「読解的鑑賞の論察（再提案）—レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐（1495-98年）」を読む」p.57.より転載【解説を補足】）

① 日常的視点 (daily view) : 或文化圏の慣習下で、人々に共通理解を齎す視点
② 想像的視点 (imaginative view) : 想像を自由に羽ばたかせて見る時の視点
③ 文脈的視点 (contextual view) : 何らかのテキスト (文献) から得られる解説に益す視点
④ 解読的視点 (decoding view) : 画像学的な対象把握を可能とする視点

ここに提起する読解的鑑賞を、視覚的な愉悦・満足を優先的に求める、一瞥的な見方とは対蹠的に、ジックリ見続ける中で、感覚も言語も動員される濃密な思考体験を培う、持続的・組織的な鑑賞と位置付ける。換言すると、パッと見的な読解的鑑賞はありえない。読解的鑑賞は、見て感じる類のアプローチと一線を画し、一連のプログラムを経る過程で熟成されるべきと解釈する。そのプログラムとして、後述の「6段階鑑賞法」を考える。

ただ、筆者は、作品を見るや魅了され、眺め続け、「いいなあ…」と言葉少なに感心する、そういう類の鑑賞も無論あつ

てよいと考える。ケネス・クラーク (Kenneth Clark) は、絵を豊かに解すための啓蒙書、『絵画の見かた (Looking at Pictures)』を著しながら、「知覚能力の限界にさらに加えて、視覚的体験を言語に移し変える困難というものがある」<sup>17)</sup>と書く。名和晃平 (彫刻家) も、造型物を、「文字や言葉では伝えきれない微細な情報」と解す<sup>18)</sup>。モーリス・メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty) も、表現者側に立ち、「画家だけがいかなる評定の義務をも負わされずに、あらゆるものを見つめる権利をもつ」<sup>19)</sup>とし、「だから、画家の前では認識や行為の通り言葉がその効力を失う」<sup>20)</sup>と書く。岸田恵理 (長野県信濃美術館) は、『鑑賞の技法 (Art of Appreciation)』を著したハロルド・オズボーン (Harold Osborne) の、「鑑賞は、美的感性的に (aesthetically) に物事に心を奪われていくこと (preoccupied) であり、「知覚力」 (percipience) と説明されるものに関わっている」<sup>21)</sup>という考え方を踏まえ、ギャラリートークで使う言葉を熟慮した。

鑑賞体験の実質とは、非言語的知覚の領域に本来あるのかも知れない。読解的鑑賞を主題としても、上記諸省察の重要性を看過するものではない旨附言したい。むしろ本稿を通じ、言語活動を優先したにせよ、読解的方略により鑑賞的理解を非言語的な深みにまで掘り下げうる可能性を示せたらと願う。

### Ⅳ 6段階鑑賞法（4段階批評鑑賞の改良版）

読解的鑑賞を行うメソッドとして、「6段階鑑賞法」を提起したい。6段階鑑賞法は、エドモンド・フェルドマン (Edmund Burke Feldman) が、『美術を通し人間となる (Becoming Human through Art)』<sup>22)</sup> 第12章「美術批評の技法の習得 (Mastering the Techniques of Art Criticism)」で提唱した、美術批評の「描写・分析・解釈・判断の4段階」<sup>23)</sup>を参照し、そこに2段階を足したものである。4段階批評鑑賞の有効性は広く支持され、筆者も学ぶ所大であり続ける『Art Education』誌<sup>24)</sup>の「指導資料 (Instructional Resources)」の、1985年 (連載開始) から90年代の指導方略は、当メソッドを基本枠組とした。日本でも、秋山希嘉・栗山裕至・前村晃により、有効性が実証された<sup>25)</sup>。

ただ、4段階批評鑑賞は、「自己表現 (self-expression)」に似る位置付けの「自己探求 (self-exploration)」—そこにはヴィクター・ローウェンフェルド (Viktor Lowenfeld) に溯る創造主義 (児童中心主義) 的風土<sup>26)</sup>も認めうるが—を主軸とするため、生徒が調べ、教師も支援的な情報提供を行う「調査」の段階や、もっと知りえた所で再び考える「再解釈」の段階は設けられない。その2点を付加した6段階鑑賞法のプログラムを、表5に示す。

表5 6段階鑑賞法のプログラム

1. 観察と描写 (observation & description)
2. 視覚的分析 (visual analysis)
3. 解釈 (interpretation)
4. 調査 (research)
5. 再解釈 (reinterpretation)
6. 判断と評価 (judgment & evaluation)

なお、補記したい点がある。4段階批評鑑賞は、鑑賞者の見方と個人的・独創的な言説を大切にする「批評」に重きを置くことから、「自ら見て感じ考え評す」ことを第一義とした。

石川千佳子は、当メソッドを紹介した論文に、「絵画や建築物を見るだけでは十分でない」<sup>27)</sup>という、読解的鑑賞の立脚点と重なる、フェルドマンの言葉を引く。そして、「批評を学習する目的は、公式的な見方に依存せずに自分自身で芸術作品を認識し評価する力を養うこと」<sup>28)</sup>だという、彼の見解を続ける。ここで飽くまで重んじられるのは、定説・既成概念に安住せず、疑問に向き合い、解らなさを避けず、努めて考える鑑賞者本位の姿である。

批評を本質視する姿勢は、前記ハウゼン、フィリップ・イエナワイン (Philip Yenawine) らの主導する、「ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー (Visual Thinking Strategies [以下、VTSと略記])」と共通する。公式 HP に、「視覚的イメージに関する討議を通じ、批判的思考 (critical thinking) と言語能力 (language skills) を高める、リサーチ・ベースの指導メソッド」<sup>29)</sup>と、VTS の趣旨が載る。その指導成果を顧み、ハウゼンは、「VTS が批判的思考力の伸長を齎し、それを他の文脈的諸関係 (contexts) や中身 (content) へと転移できる証拠を見出した」<sup>30)</sup>と解す。4 段階批評鑑賞が、各段階に発表・情報交換・話し合を有効に位置付けつつ、個の内に観察眼・分析的洞察力・読解力・言語能力・批評的力量等を培うが、VTS はより自覚的にグループ学習を一般型とし、問答・対話・議論・発見の湧き立つ相互啓発的な学び合いの場の中で、1 人 1 人が批評的成熟に向かう所に主眼を置く。「VTS は参加を促し、自信を与え、特に真剣に取り組む者同士の間ではそうである」<sup>31)</sup>と、公式 HP にはある。

ここに認めうる学習者主体を是とする姿勢は、教育学的には、知の注入でなく構築を尊ぶ構成主義的教育観と結び付くと理解できる。学びを知の構成と解す構成主義の特徴について、中村恵子は、「生徒の学習への積極的参加を強調」<sup>32)</sup>し、「授業における「教師中心」から「子ども中心」へ、「教え」から「学び」への転換を方向づける」<sup>33)</sup>と要約した。VTS の一形態として、アメリカ・アレナス (Amelia Arenas) が行う「対話型鑑賞」も、同系列に入る。長井理佐は、鑑賞教育セミナーで聴いたアレナスの語りとして、「美術史の知識はいらない」「観衆から感嘆詞 (Ah ha! Wow! etc.) がでる情報だけが必要なもの」を挙げた<sup>34)</sup>が、これは反知性の主張ではなく、白紙の状態で作品の事実を観察し尽くした所から知を形成することの意義を示唆したものである。

だが、筆者は、そういう創造的な「知の空間」に、外からも千差万別な知としての見方・解釈・学説・価値観等や文化論的・歴史背景的な種々情報を積極的に入れたく思う。その結果、知と知が<sup>せめ</sup>闘い合い攪拌され混乱しながらも止揚・調整される統合的過程が、鑑賞には必須と考える。特に見ることと考えることを等しく重んじる読解的鑑賞ではそうである。そうすることで、独断的見解をユニークさとする弊に陥ることもなく、個性的であると共に学術的客観性をも備える柔軟な持説を育めると思うからである。

## V 「天地創造と楽園追放」への 6 段階鑑賞法の適用

第 33 回美術科教育学会の口頭発表で、筆者は、読解的鑑賞 (絵の場合) を、「画面を観察し、そこから多様な情報・意味・メッセージを抽出し、それらを関連付け、総合的に解釈する行為 (最終的に批評を導く)」<sup>35)</sup>と定義した。そう考える

に当たり、4 段階批評鑑賞を範にしたと共に、OECD (経済協力開発機構) の PISA 調査で測定された「読解の 3 過程」も参考とした。その内容を表 6 に引き、4 段階批評鑑賞の対応段階を矢印で附記する。

表 6 読解の 3 過程 (出典:文部科学省 HP「PISA 調査 (読解力) 結果等に関する参考資料」<sup>36)</sup>)

①情報の取り出し…テキストに書かれている情報を正確に取り出すこと。 ⇨描写 (基本は観察)・分析
②解釈…書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり、推論したりすること。⇨解釈
③熟考・評価…テキストに書かれていることを知識や考え方、経験と結び付けること。⇨解釈・判断

ここでテキストを絵と看做すなら、3 過程とはまさしく絵の鑑賞段階と解せる。現に PISA 調査では、テキストを「連続・不連続」の 2 類型に分け、前者が諸形式の文、後者は視覚的図解類を指すとし<sup>37)</sup>、絵は後者に属す。

本章では、かような読解を中心に、6 段階鑑賞法のプログラムに沿って、ジョヴァンニ・ディ・パオロ「天地創造と楽園追放」(以下、C&E と略記) を見てゆく。「図画工作科指導法基礎」でも、その読解的鑑賞の検証を重ねてきた。宗教画の図像伝統と 2 つの代表的画題に接することで、西洋 (キリスト教文化圏) を知りうる絵、それと共に、円盤が突如出現する等、奇想天外で、物語喚起力が強く、生徒の内に無意識に言葉を紡がせてしまうような絵として、本作を選んだ。

### 1. 観察と描写

第 1 段階では、「見ること (観察)」と「見たものの言語化 (描写)」を一組の活動として行う。フェルドマンに倣うなら、「見落としのない完全でしかも中立的な記録」<sup>38)</sup>の作成が目標となる。よって、観察内容をワークシートに漏れなく記録し、続いてその発表を聴き合う進め方が妥当である。その時の見方は日常的視点によってよく、使う言葉も一般的語彙でよい。想像力も働かせる。スムーズに行かず、不明な対象を何か適切な名で呼ぼうと努めることも、言語的練熟を齎し、造語感覚も磨くことが期待できる。

本来は生徒の語群を記録すべきだが、表 7 (左欄) に観察結果を総覧化したので参照戴きたい (画面左、次に右と進む)。

導入部では、アレナスも頻用する定番のフレーズ、「よく (注意深く) 見よう!」が効果的である。そして、<sup>インクアウト</sup>対話的な展開へ導くなら、「(画面に) 何が描かれている?」という問いを勧めたい。

なお、視認と解釈とは分かちがたい関係にある。解りづらい描出物を見て、「何だろう?」と考え始める時、既に第 3 段階「解釈」に足を踏み入れている点を了解したい。

### 2. 視覚的分析

第 2 段階が問題とするのは、前段階で追ったような描写内容の名辭的側面「これは～である」ではなく、形式的性質 (形や色彩、模様や材質、サイズ等) であり、個々形像ではなく、諸要素間の様々な関係、画面で働く構成的仕組である。関係の例として、位置関係 (高低 [上下]、左右、中心と周縁、垂直・水平・斜め、分割領域の面積比等)、形態の関係 (類似と相違)、大小関係、配色、明暗諧調、空間の粗密等を列挙できる。構成的仕組の例としては、間隔 (等間隔か漸次的変化か)、遠近

法（1点透視等）、各種構成原理（対比・強調・比例・均斉・調和・繰り返し等）、および視点の位置の違い等を列挙できる。また、絵具等の画材とそれを操る技法も対象となる。

学習指導要領の観点から言うなら、第6節美術と、そこへの系統的接続を図る第7節図画工作（『中学校学習指導要領』と同期改訂の現行『小学校学習指導要領』）に新設された、「共通事項」に登場する語群、「図工：形や色、組合せ、動きや奥行き等／美術：形や色彩、材料、光等」が、分析対象に相当する。

C&Eを純様相的に見て解るのは、画面が広い左と狭い右に二分される点である。左下角に、画面を大きく占める円を配し、その上をギザギザの囲む翁が飛ぶ。この翁の横顔からは金線が放射される。鋸歯状パターンは、反復基調の画面右と響き合う。画面右は、上から、繁る葉と沢山の果の塊の集合、それを支える樹幹7本の林立（左から右へ僅かずつ間隔が開く）、裸体3人の並立、太線4本の「∞」型配列が続き、サンドイッチと似る層を成す。中間ゾーンの野にも、草花の諸パターンが繰り返す。

かかる分析後、目を地平線に転ずる。すると、それが基底線的な役割を演じ、天と地を分かつことに気付く。つまり画面は、多様な要素に覆われるが、左領域が広い田の字型を潜ませるのである（構図的安定の秘訣）。

なお、左右分割に関し、次段階「解釈」に踏み込むが、絵の側に立つ時、一般に画面右が聖域、左が俗域となる。

円は、色の違う弧が次々合わさる同心環を成す。円の青の明暗変化と青空のそれ（上空が濃く、地平線辺りが薄い）が呼応する。翁の服も青く彩られたため、円・空・翁の間に青の照応的連係が生じる。

画面を覆う鱗・亀裂にも注目したい。ジグソーパズルと似る規則的パターンを呈す塗膜の外観も、分析対象となる。少なくともテンペラ絵具を知る一助となる。加えて、金の放射線が真っ直ぐ伸びるが、刻線だろうか。複製資料（印刷〔紙媒体〕・映像〔電子媒体〕問わず）ではやはり視認に限界がある。実作鑑賞がベストである。

### 3. 解釈

第1・2段階が、感動・好悪判断とは関係なく、誰もが客観的に迫りうる内容を扱うのに対し、第3段階は、絵を解読し、対象に意味を賦与するから、鑑賞者の主観的見方や価値付けも混じる。それゆえ、活動が高次化し、難度が増す。とは言え、前二段階同様、作品的事実在即す姿勢が基本となる。

フェルドマンは、解釈を「仮説の形成過程」<sup>39)</sup>と捉え、「優れた解釈は、作品からひきだされた視覚的根拠の重要な部分から意味を形成すること」<sup>40)</sup>とした。ここで留意すべきは、何をもって解釈するかである。初見の絵でも、常識と想像で画面を或程度解せよう。が、限界もある。祭壇画類に代表される説話画では、元になった話、想源のテキストを知ることが、絵の語る内容の把握にとって欠かせない。宗教画や寓意画だと、広範な図像学的知識も求められる。つまり前記4視点を総動員して、1枚の絵を読もうとする訳である。

そこで、C&Eを予備知識抜きで常識的に解釈する例を示そう。さて、そう記したが、画家の空想力は超現実主義にも比肩しうる。翁の飛翔（重力からの解放）や、顔からの光の直線の放散を合理的に解するのは難しい。しかも翁を、顔と翼

の合体した何羽もの青い生き物（人面鳥？）が困む。巨大な円盤（車輪）も唐突だ。翁は円盤の中央の俯瞰図を指差し、円盤を転がしているとも解せる。前方を、火焰のごとき翼を持つ天使（青年）と男女一組が歩くが、皆裸で、常夏か。葉や花が股を隠す（現代日本なら、公然猥褻罪〔刑法第174条〕適用のケースか）。男女は振り向くが、天使が呼び掛けたからか。それとも、問題が発覚し、「出て行け」と強制追放される場面か。林檎か柑橘類の生る樹が整列し（果樹園？）、足許に実が転がるが、2人の食糧か。黒い太線4本は、落下果実を喰らおうと、また、3人を襲おうと、土中を進む大蛇か。花各種が咲き、兎も潜む牧歌的な野辺は平和を、快晴の空の清澄感に満つる青は穢れなさを象徴しそうだ。（他に3人は原始人、鬼ごっこの場面等々）

説話画だと、「登場人物は誰？」「何をしているところ？」「何の場面？」という類の発問が、想像と思考を掻き立てる働きをなすため、有効である。因に、VTSの初習者向けの「基幹的な3つの問」<sup>45)</sup>は、「ここで何が起っている？」「何を見て、そう言う？」「もっと何か見つけられる？」である。

次に想像的解釈の例を示す。「図画工作科教育I」（平成23年度スクーリング〔明星大学通信教育部〕）で、上記問を示してから、受講生がSF的枠組で語った内容を要約する。翁は聖者を装う悪魔。円は聖なる裸者3人を吸い込むためのブラックホール。3人は悪魔に追い詰められ、窮地に陥る。拝聴し、筆者は大胆な想像と豊かな創話力に唖った。

しかし、上記解釈2例は、C&Eが依拠する話を知った瞬間、本質的変容を蒙る。話とは、蛇の誘惑、アダムとエバの墮罪、樂園追放を記す、『旧約聖書』創世記3章である。言うまでもなく、当話を知る者は、最初からその枠組で絵を眺めた筈である。では、文脈的解釈の例を示そう。

C&E右側は、本章24節〈神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。〉を典拠とする。男女は、原罪と死を齎したアダムとエバで、聖書記載（21節）通りとするなら、神製皮衣を着せるべきである。無垢ゆえ裸身でいられた2人は、実を齧った途端、恥（罪と連関）の意識が生じ、無花果の葉の綴れで腰を覆う（6・7節）。天使は、「神の臨在を示す天的存在で、御使い（天使〔筆者補記〕）」<sup>46)</sup>と解すケルビムによる。ただ、聖書に追い立て役との記載はない。佐々木英也によると、天使が神の代行者となり2人を退ける型の採択期は、12世紀末頃<sup>47)</sup>で、C&Eは当系譜を継ぐ。果樹は園の中央を示し、命の木（永遠の命を授く実が生る）と善悪の知識の木（禁断の果実が生る）を喚起する。太線4本は、園の4つの源流、ピション、ギホン、ヒデケル、ユーフラテスを表す（2章10-14節）。輪は園への出入りを遮断する剣の旋回を象徴し、赤い弧は炎を意味する。

輪が大きく占める左側は、C&Eの画題から天地創造を表すと解るが、情報伝達は明晰とは言いがたい。翁は神・創造主である。輪が世界を表し、中央の風景は、注視すれば、トップの山の頂から線が4本流れ出るので、上記4源流と考えられ、エデン（語義：隅々まで潤う地）だろうか。4源流の名を記す2章10-14節は、地理的描写も伴うため、「最古の世界地図」<sup>48)</sup>と読む可能性も指摘できる。とすると、輪の内側は地図？神の指が2人の行き先を示し、枝別れする流れが早魃時の鱗と似る点から、そこが荊と薊の呪われた地（17-19節）とも解せよう。

表7 解釈総覧【主要参考文献】『聖書』(新改訳と新共同訳)、マルセル・パコ(松本富士男・増田治子訳)『キリスト教図像学』(白水社、1993)、柳宗玄・中森義宗編『キリスト教美術図典』(吉川弘文館、1994)、水之江有一『図像学事典—リバーとその系譜』(岩崎美術社、1991)、ジェイムズ・ホール(高階秀爾監修)『西洋美術解説事典—絵画・彫刻における主題と象徴』(河出書房新社、2004)、ミランダ・ブルース=ミットフォード(若桑みどり訳)『サイン・シンボル事典』(三省堂、2004)

観察と描写 (日常的視点)	解釈(文脈的視点)	解釈(解読的視点)	調査(有益な新視点 [情報])
翁(髪・髭・眉が銀灰色)	父なる神(創造主)。『旧約』創世記1章1節に、(初めに、神が天と地を創造した。)とある。	三位一体の第1位格:神(父)。〈参考〉第2位格:イエス・キリスト(子)、第3位格:聖霊(鳩で表す)	神像的描写は神の不可知的性質ゆえ避けられたが、中世末に翁像が出現。
長袖の服(青)・布(白)・リボン	『新約』ヨハネ福音書19章23節に、イエスの服と縫目なしの一枚織の着(高額の布)が記録される。	青:「真理、永遠、無限、調和、希望」 <sup>41)</sup> 白:純潔(穢れなき)、「神の栄光と叡知」 <sup>42)</sup>	古代ローマの服飾:トウニカ(下着)とトガ(一枚布の上着)
翁の顔より出る放射線	栄光在(含讚美)。創世の第一声:「光よあれ。」創世記1章3節	『旧約』詩篇19章1節、『新約』第IIコリント11章7節等、各所に「神の栄光(God's glory)」が出てくる。	『旧約』出エジプト記34章30節に、モーセの顔の肌が光を放つ話が載る。
翁を囲む翼の列	「頭+翼」型天使(人面鳥ふう)の群れ。『新約』ルカ福音書2章13節が、神の栄光を讃える天の軍勢を描写。	上級天使(熾天使「セラフィム」、智天使「ケルビム」)。全身青なので智天使(赤だと熾天使)。『旧約』イザヤ書6章2節に、6翼のセラフィムが登場する。	5世紀に天使階級が体系化され、第2・第3階級と続く(受胎告知のガブリエルは第3に属す)。
円盤(同心環)	燃える剣の回転(進入禁止の標識)が、創世記3章24節に載る。赤筋:炎	世界(天地創造)、天国(パラダイス)、永劫的循環、「神の完璧性、全能ぶり、また宇宙の無限」 <sup>43)</sup>	色分けされた弧線が四大元素を暗示。車輪は無常的移ろいも含意。
外周部に12の汚れ(規則的配列)	輪は占星術で使う黄道十二宮で、汚れは12星座の図案(ダイアグラム)。『新約』マタイ福音書2章1-12節に、メシア降誕を教える星を発見・追跡した、東方の占星学者達の記事が載る。	十二宮は、オカルト的異端思想を背景としつつも、時禱書に年暦と並置されることも多い。諸惑星、四大元素、季節、人生の年齢的階梯、色、気質や身体部位、天使階級等と連関。	12は重要な数。例:12部族は『旧約』民数記、12使徒は福音書4篇参照。昼夜は各12時間、1年は12ヶ月で成る。
輪の中央の俯瞰的山岳風景	原初の世界地図(エデンの園)? 峰に見えるのは川。創世記2章10-14節が、エデンの4源流を説く。	翁が俯瞰図を指差すことから、そこをアダムとエバの行き先(喰うために男が生涯耕し続け、遂に塵に還る荒野)とも解せる。	中世欧州で製作された古式地図で、通称「世界地図(マップ・ムンディ)」。
裸の男女	アダムとエバ。人類最初の夫婦の創造が、創世記2章で詳述される。	人類の祖でありながら、原罪(子孫に下る呪い)の象徴ともなる。蛇の誘惑と墮罪(神との約束の破棄⇒神への叛逆)を記す。創世記3章1-7節参照。楽園追放の出来事は、同章23-24節に載る。	墮罪により死を齎したアダムを、贖罪で命を授けるイエスの雛型と解す(『新約』ローマ5章14節参照)。子を産むエバに対し、「神の子」の母となるマリアを新しきエバと解す。
天使(背に火焰? ⇒翼 [by 金箔])	ケルビム(園への道を守護)と思う。創世記3章24節参照。	ケルビムなのに、「頭+翼」型天使とは異なり、翼を除けば人間の青年のようだ(形姿はガブリエルの)。裸で、絵では追い立て役として登場。	天使(御使いとも言う)は、神託を運ぶ「使者(メッセンジャー)」を意味する。
翁・天使の横顔を囲う金盤(by 金箔)	イエスが祈る内、顔の様子が変わり、衣が光り輝く場面(ルカ福音書9章28-36節)参照(⇒キリスト変容図)。	聖性・栄誉を象徴する光輪(ニムプス)。金は貴き光と解され神性を表す。ヨハネ福音書1章9節は、イエスをくまごの光と形容した。	科学的合理主義の態度が広まると、金盤は次第に楕円の弧線に変わる。
7本の果樹	創世記2章8-17節が、命を養う木々や善悪の知識の木について記す。	林檎か柑橘類:原罪(original sin) 7:1週間(創世6日間+安息日【完成の確認】)	7は特別な数。例:三位一体(3)+四大元素(4)=7。七美德、七罪源等々。
撫子(カーネーション)、白百合、薔薇(紅白)等	『旧約』雅歌2章1節に、「わたしはシャロンのばら、野のゆり。」とある。(『新共同訳』は「ばら」、『新改訳』は「サフラン」と訳出)。	撫子:受難、受肉(托身) 白百合(聖母の花):純潔、処女性(ヴァージニティ) 薔薇:白は純潔、紅は殉教	墮罪前、楽園の薔薇は棘(罪・悔悛の徴)がなかった(伝承的理解)。無原罪性(カトリック的教義)から、聖母は「棘なき薔薇」と呼ばれたりもする。
草花の繁茂する野	エデンの園(調和を具現)。陸と植物の創造(第3日【創世記1章11-13節])	神の摂理・法則が齎す、命・肥沃・豊穡を示唆。	エデンの意:「歡喜」または「隅々までよく潤された所」 <sup>44)</sup>
足許に転がる林檎	禁断の果実(死も象徴)。夫婦が実を食べる。創世記3章6節参照。	原罪の徴だが、食糧とも解せる。創世記2章16節に、アダムへの神の言、「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。」が載る。	神は園の中央に2種類の木を生えさせた(創世記2章9節参照)。命の木と善悪の知識の木で、問題の木は後者。
兎	野の獣を代表して登場? 動物の創造(第6日【創世記1章24-25節])	多産(好色・淫慾も含意)の徴。兎は、最高位の被造物たる男女への、「生めよ。ふえよ。地を満たせ。(創世記1章28節)なる神の祝辞を想起させる。	『旧約』申命記14章7節は、食べてはならぬ穢れた動物として、駱駝・野兎・岩狸を挙げる。
断層?の太線4本(大蛇?)	エデンから流れ出るビション、ギホン、ヒデケル(ティグリス)、ユーフラテスの四川(創世記2章10-14節参照)。	四川は、命の源たる四福音書を象徴。『新約』ヨハネ黙示録22章1-2節が、聖都を流れる命の水の川を描写。兩岸に実12種が生り、葉が民を癒す、命の木が育つ。	4も基本的な数。例:四大元素(火・風・土・水)、四気質(多血・憂鬱・胆汁・粘液)、四季、方角、四福音書等。
青空	天の創造(第2日【創世記1章6-8節])	教会の青く塗った天井は蒼穹を模し、目的地たる天国(永遠の住まい)を喚起する。	聖母の青いマントは悲歎を秘める。その肩に光る金糸刺繍の放射印は、海の星(ステラ・マリリス)を表す。

かようにテキストはC&E解読の豊富な情報源となる。上記指摘は表7(中欄)にまとめた。と共に、キリスト教図像学の象徴体系も読解を掘り下げる上で有益である。当領域の解釈例も示したく、表7(右欄)に整理したので、参照願う。解読対象となるのは、人、動植物、自然界の物質、人工的物品等初め、幾何図形・模様・文字・色彩・数等様々である。幾つか列記しよう。園には、撫子、白百合、紅白の薔薇が咲く。撫子は、花蕾が釘型の丁子と香りが似るため、磔刑を聯想させ、受難の意を持つ。受肉(神が人となりて降誕する事態)も意味するのは、語呂合せからである。聖母の持物の白百合は、清浄懐妊を背景に、純潔・処女性を表す。薔薇は、白が純潔、紅(血が混じると解釈)は殉教を表し、棘は墮罪の悔悛と解す。アダムとエバの間で蹲る兎(天使の足許にもう1羽?)は、夫婦(人類の祖)への神の祝辞、「生めよ。ふえよ。地を満たせ。」(2章28節)を踏まえ、多産と関係する。円は全き相称性から、完璧・全智全能の徴となり、同時に世界を表し、回転も示す。顔の周りの金盤は聖性を象徴し、時代が下り、頭上の輪線に変わる光輪である(悪魔の誘惑に屈したアダムとエバにはな

い)。他も加わり、図像学的意味の連鎖が錯綜化・緻密化してゆく内に、C&Eの読解の密度が増し続ける。

#### 4. 調査

中学生は、概して謎解きのような前記読解を面白がり、もっと知りたいと感じるようだ<sup>49)</sup>。調べて知り解りたいという関心・意欲・態度は、学習の核・基盤を成し、ここを開拓できれば作品理解が促進され鑑賞の実質は高まる。

では、調査によりどういう進展が齎されるかを、C&Eをサンプルとして幾つかの角度から確認したい。

図像的類似性を掴むことで、C&Eが扱う主題の理解を広げることが可能となる。メジャーと思う絵の中に、楽園追放場面と関連する図像を探し、カルミネ聖堂ブランカッチ礼拝堂の壁を飾る Fresco 連作の1点、マザッチオ(Masaccio)「楽園追放(1425-27年頃)」を選ぶ。C&Eの幻想性と国際ゴシック様式に倣うシエナ風の装飾美は、マザッチオの迫真性とフィレンツェ流の古代彫像的な量塊性・動勢と対立するが、天使が夫婦を追う舞台設定が共通し、比較から当図像伝統への認

識が増す。天地創造場面の方は、ミケランジェロ・ブオナルローティ (Michelangelo di Lodovico Buonarroti Simoni) が成し遂げたシステーナ礼拝堂天井画の一劃、「アダムの創造 (1510年)」を選ぶ。当比較も図像的理解を高める。風貌の相似る神が、天使を多数随え宙を翔け、目的は違えど人差指を伸ばす。ただし、違う点もある。C&Eは上級天使 (青一色だから智天使)、ミケランジェロは無翼の天使を登場させた。

所蔵先のメトロポリタン美術館 (以下、Metと略記)のHPも参考に値する。「この板絵は、元々は、シエナのサン・ドメニコ聖堂をかつて飾った、ジョヴァンニ・ディ・パオロのゲエルフィ祭壇画の最左端の裏面である」<sup>50)</sup> というような基本情報が得られる (「研究が継続中ゆえ、結果によっては情報の変更もありうる」<sup>51)</sup> との但書きも載る)。さらにC&Eは「シエナ絵画の傑作で、ダンテ (Dante Alighieri) 『神曲』の描写が想起させる天国のヴィジョンを示す」<sup>52)</sup> と説く。

それから、何と言っても、研究論文が最上の情報を提供してくれる。峯近慶子は、「ジョヴァンニ・ディ・パオロ作《天地創造と樂園追放》—図像解釈の試み—」で、ジョン・ポープ=ヘネシー (John Pope-Hennessy) 説を踏まえ、ゲエルフィ祭壇画中央図を、「聖母子と四聖人 (1445年/ウフィツィ美術館蔵)」と解す<sup>53)</sup>。裏面はその下辺にズラリ並び、Met蔵のもう1点「天国 (1445年)」も連なると上記HPが記す<sup>54)</sup>。

峯近論文からは、有益な視座が数多く得られる。中でも、輪を、生活圏 (地球) を円盤で表す中世的図解である、「世界地図 (mappa mundi)」として論ずる箇所が面白い。外周部の汚れ (金箔が剝離?) も何か解る。占星術と密接な、黄道十二宮の12星座だった。峯近は、「神の手が示す黄道十二宮の位置は、一五世紀の占星術に基づく二二月半ばと四月半ばの間、三月二五日の受胎告知の祝祭日を表している」<sup>55)</sup> と書く。これにより、キリストの犠牲死・復活による贖罪という、『新約』の根幹的メッセージを『旧約』に接ぐことができ、原罪からの救済をC&Eは明瞭化する。上記HPにも関連的記述があり、紹介したい。「四大元素 (内側から、火:赤⇒風:薄青⇒土:乳白・薄茶⇒水:青 [筆者推察]<sup>56)</sup>) を表現した、同心環の連続する弧が囲む中央部の地球、中世・ルネサンスの宇宙論に則り、太陽も含めた既知の諸惑星、最後に黄道十二宮の諸星座も伴う形で、宇宙が天球で示される」<sup>57)</sup> 多義的・重層的理解が可能なる輪を、峯近は車輪とも捉え、「世界内部での周期的な運動、再開、創造の更新、ひいては世界の転変に至る道を意味する」<sup>58)</sup> とした。

服飾史も紐解けば、神が着る服も解る。神は、古代ローマ市民の服装を模し、トゥニカ (肌着) の上にトガ (1枚布) を羽織る。これはイエスや12弟子らの定番的恰好でもある。

## 5. 再解釈⇒判断と評価

第5段階で設ける「再解釈」は、解釈の更新を目的とし、意見発表、対話型の学び合い、ワークシートの記入等、様々な進め方を試せる。ただ実際には再解釈的思考は自ずと熟成してくる。前段階「調査」を進める内にあれこれ思う訳であり、知的刺激を伴う新知見との遭遇が、解釈を次々組み替えるからである。そして、前四段階での学びが、それを可能とする素地を準備する点を強調したい。

本稿では絵の読解過程を階梯のイメージで順次示すが、各段階間の境界線が崩れる場合も少なくない。観察段階でも対

象の解釈を試みるのが当然起こりうる。山口大学教育学部附属山口小学校で、6年生がアルブレヒト・デューラー (Albrecht Dürer) の三大銅版画を見る授業を参観したが、「画面を見よう。何がある?」という問掛けが呼び水となり、スライドを前に手が挙がり続け、砂時計を見つけた児童は、それが時と命を表すと解釈し、画家のそういう表し方を称讃した<sup>59)</sup>。ここには観察が解釈を促し評価を導く連鎖が生じ、観察⇒解釈⇒評価の3過程が凝縮されている。

さて、最終ステージは「判断と評価」となるが、ここまでの道程を顧みたい。観察は、全段階を通じ、一貫してフル稼働すべき課題であり、その積み重ねでC&Eの熟知が進み、親しみも増す。加えて、言語的な記録・チェック・表現を繰り返し返しながら、観察を肉付け、感受・解釈・思考を確り深めてゆく。疑問点は調べて解決するよう努め、知識拡充にも意欲的に取り組む。そのように行ってきた鑑賞活動を振り返り省察し批評的見識を膨らませるのが、第6段階である。

漠たる感想を話すのでもなく、徒に感動する必要もない。様々な理由・根拠もしくは証拠を挙げ、私が見て感じ思い考えたことから成る自分なりの作品観 (嗜好的要素を含んでもよい) を、できるだけ熟した己の言葉で、自信をもって語ることが目標となる。当段階を、国語科との連携も視野に入れ、より本格的な批評行為としてのアートレポート<sup>60)</sup>の執筆で締め括るのも一案と思う。

## VI 結

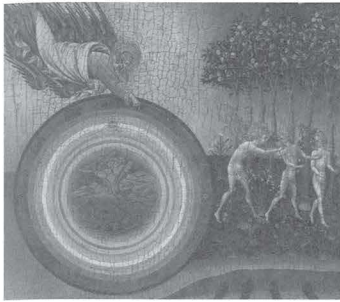
本稿では、中教審『答申』が謳う言語活動の充実の趣旨に立脚して、絵を対象とする読解的鑑賞を主張し、それを体現する指導メソッドの一形態として、6段階鑑賞法を提案した。方法を過不足なく述べるのは難しかったが、テキスト・図像学を両輪とする絵の読解例を、専門的な学術研究にも目を通しながら、今後も蓄積してゆく計画である。

東西比較の作例としては、受刑・左遷と怨霊による天変地異が、樂園追放・磔刑・復活の西洋的テーマ群と呼応し、かつ、異時同図の構図がC&Eと共通する、「北野天神縁起絵巻 (承久本/北野天満宮蔵)」を考えるが、提案は別の機会としたい。

なお、6段階鑑賞法の第5段階「調査」は、審美的経験を言語化して記述し、第三者に的確かつ豊かに伝達できるための用語を学ぶ貴重な機会でもある。これに関し、中教審がまとめた言語能力の伸長に益する3つの条件<sup>61)</sup>—①語彙の拡充、②読書活動の推進、③学校図書館等の言語環境の整備—は参考となり、どれも鑑賞に当て嵌まる。作品解説を取める図録や画集、美術史の論文・書籍、新聞文化欄、雑誌掲載のエッセー等を読む習慣を培いたい。さらにコンピュータも有能な探究媒体となる。

最後に、観察と記述が鑑賞の何よりも基礎となる点を力説したい。若桑は、「美術史では、画面の構成から衣服のひだやその文様まで、何がどのように描いてあるかを精密に観察し、記述することが第一の作業である」<sup>62)</sup>と書く。かかる作業をベースとして、解釈し熟慮を重ねれば、読解力・言語能力・知識活用能力等を高めることが期待できる。

鑑賞は、見ることに始まり、見ることで終わるが、その過程を読解的方略を使ってどう組織・計画し中身濃くするかをこれからも考え続けたい。



### < 参考図版 >

ジョヴァンニ・ディ・パオロ (Giovanni di Paolo) 「天地創造と楽園追放」1445年板、テンペラ、金 46.4×52.1cm ニューヨーク、メトロポリタン美術館 (図版典拠: Barbara C. Matilsky, *Fragile Ecologies: Contemporary Artists' Interpretations and Solutions*, Rizzoli International Publications, Inc., 1992, p.16.)

### 註

- 1) 本稿に先行する拙稿3篇は、次の通り。①「読解的鑑賞の提案—「放蕩息子」6点を読む」『信州大学教育学部紀要』第99号, 2000, pp.9-19. ②「対話型鑑賞, 鑑賞能力(美的感受性)の発達, 鑑賞指導メソッドの研究—読解的鑑賞の準備的論察」『美術教育学』第31号, 2010, pp.139-150. ③「読解的鑑賞の論察(再提案)—レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐(1495-98年)」を読む」『大学美術教育学会誌』第42号, 2010, pp.55-62.
  - 2) 次の2活動より多くを学んだ。①「鑑賞教育プロジェクト(「美術科教育特論演習Ⅱ」課題)」(山口大学教育学部附属山口小学校/指導協力者: 静屋智教諭, 実施期間: 1992-94年 ②「鑑賞授業プロジェクト at 鍋屋田小」(長野市立鍋屋田小学校/指導協力者: 西澤剛教諭, 実施期間: 2002-05年
  - 3) 岡崎勝世『聖書 VS 世界史』講談社現代新書1321, 講談社, 1996の表紙の絵。
  - 4) 次の2文献を参照。① Abigail C. Housen, "Aesthetic Thought, Critical Thinking and Transfer," *Arts and Learning Research Journal*, vol.18, no.1, 2001-02, pp.126-127. Available at <http://www.vtshome.org/> ②マイケル・J. パーソンズ(尾崎彰宏・加藤雅之訳)『絵画の見方—美的経験の認知発達』法政大学出版局, 1996 Michael J. Parsons, *How We Understand Art: A Cognitive Developmental Account of Aesthetic Experience*, Cambridge University Press, 1987.
  - 5) 岡田匡史・高山顕光「「鑑賞教育」の基礎研究(H8年度)Ⅱ—「美術科教育演習(前期)」の活動報告と2つの鑑賞題材」『信州大学教育学部紀要』第94号, 1998, p.12.
  - 6) 石崎和宏・王文純「美的感受性の発達に関する基礎的研究—先行研究資料の批判的検討」『美術教育学』第18号, 1997, p.7.
  - 7) 中央教育審議会答申『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』2008, p.53.
  - 8) 同, 同頁。
  - 9) 同, 同頁。
  - 10) 「言語活動に関する学習指導要領改訂の記述例(抜粋)」中央教育審議会答申『言語活動の充実について—幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(抄)』2008, p.9.
  - 11) 若桑みどり『絵画を読む—イコノロジー入門』NHKブックス668, 日本放送出版協会, 1993, p.11.
  - 12) 同, 同頁。
  - 13) 内田洋子(文筆家/ミラノ在住)は, イタリアの美術の授業について, こう語る。「目の前の絵画をただ「美しい」と言うだけでは駄目。どう美しいのか。どう感じたのか。自分で考え, 自分の言葉で表現することを徹底して教えられます。」内田洋子(聞き手: 杉井昭仁)「家
- 族の絆と自分を支えに(耕論/幸せなイタリア)』『朝日新聞』2011.8.10
  - 14) 前掲 [11], p.58.
  - 15) "read," *Webster's New Collegiate Dictionary*, G. & C. Merriam Co., Springfield, Massachusetts, 1981, p.953.
  - 16) 「読解の4視点」岡田, 前掲 [1-③], pp.58-61. 参照。
  - 17) ケネス・クラーク(高階秀爾訳)『絵画の見かた』白水Uブックス1066, 白水社, 2004, p.11. Kenneth Clark, *Looking at Pictures*, Readers Union, 1962.
  - 18) 福岡伸一×名和晃平「[対談] 生命の本質に迫る彫刻とは?」『美術手帖』第63巻・第955号, 美術出版社, 2011, p.45.
  - 19) モーリス・メルロ＝ポンティ(滝浦静雄・木田元訳)『眼と精神』みすず書房, 1986, p.255. Maurice Merleau-Ponty, *Éloge de la philosophie et L'oeil et l'esprit*, Editions Gallimard, Paris, 1953 et 1964.
  - 20) 同, pp.255-256.
  - 21) 岸田恵理「芸術鑑賞における言葉の役割—美術館におけるギャラリートークの場合—ハロルド・オズボーン『鑑賞の技法』にもとづく」『美術教育学』第16号, 1995, p.104.
  - 22) Edmund Burke Feldman, *Becoming Human through Art: Aesthetic Experience in the School*, Prentice-Hall, Inc., 1970.
  - 23) 石川千佳子「『美術批評の方法論』—Becoming Human Through Artにみる批評の方法論とその実践について」『宮崎大学教育学部紀要—芸術・保健体育・家政・技術』第66号, 1989, p.2.
  - 24) NAEA (National Art Education Association) 発行の隔月刊教育誌。
  - 25) 秋山希嘉・栗山裕至・前村晃「造形美術作品の鑑賞学習に関する研究—フェルドマンによる批評学習の実践的検証」『佐賀大学教育実践研究』第19巻, 2003, pp.17-31. 参照。
  - 26) 新井哲夫「ヴィクター・ローエンフェルドと思春期の美術教育—我が国における児童中心主義の美術教育に関する研究(3)」『群馬大学教育学部紀要—芸術・技術・体育・生活科学編』第43巻, 2008, pp.15-53. 参照。
  - 27) 石川, 前掲 [23], p.1. から重引。op. cit., [23], p.348.
  - 28) 同, 同頁。
  - 29) "Visual Thinking Strategies" <http://www.vtshome.org/>
  - 30) op. cit., [4-①], pp.99-100.
  - 31) op. cit., [29]
  - 32) 中村恵子「教育における構成主義」『現代社会文化研究』第27号, 新潟大学大学院現代社会文化研究科, 2001, p.283.
  - 33) 同, 同頁。
  - 34) 長井理佐「対話型鑑賞の再構築」『美術教育学』第30号, 2009, p.269.
  - 35) 岡田匡史「クリスマスの図像学:西洋文化理解の一試行—ヒューホ・ファン・デル・フース「ポルティナーリ祭壇画(中央図/1475-80年)」の読解的鑑賞」第33回美術科教育学会(富山大会), 富山大学五福キャンパス, 2011.3.26
  - 36) 文部科学省「PISA調査(読解力)結果等に関する参考資料」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/007.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/007.htm)
  - 37) 同 HP
  - 38) 石川, 前掲 [23], p.2.
  - 39) 同, p.5.
  - 40) 同, 同頁。
  - 41) 柳宗玄・中森義宗編『キリスト教美術図典』吉川弘文館, 1994, p.392.
  - 42) 同, 同頁。
  - 43) 同, p.387.
  - 44) 『聖書(新改訳)—注解・索引・チェーン式引照付』いのちのこことば社, 1987, p.3. (『旧約』篇)

- 45) op. cit., [4-①], p.100.
- 46) 前掲 [44], p.5. (『旧約』篇)
- 47) 佐々木英也『マザッチオールネサンス絵画の創始者』東京大学出版会, 2001, p.186.
- 48) 前掲 [44], p.3. (『旧約』篇)
- 49) 以下体験に基づく。岡田匡史「絵を読む, 西洋を読む—レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」を中心に」信州大学出前講座, 須坂市立東中学校視聴覚室, 2009.9.11 美術部員が参加。
- 50) “Works of Art: Collection Database” [http://www.metmuseum.org/works\\_of\\_art/collection\\_database/all/the\\_creation\\_of\\_the\\_world\\_and\\_the\\_expulsion\\_from\\_paradise\\_giovanni\\_di\\_paolo/objectview.aspx?page=1&sort=4&sortdir=asc&keyword=“Giovanni di Paolo”&fp=1&dd1=0&dd2=0&vw=1&collID=0 &OID=15000019&vT=1&hi=0&ov=0](http://www.metmuseum.org/works_of_art/collection_database/all/the_creation_of_the_world_and_the_expulsion_from_paradise_giovanni_di_paolo/objectview.aspx?page=1&sort=4&sortdir=asc&keyword=“Giovanni di Paolo”&fp=1&dd1=0&dd2=0&vw=1&collID=0 &OID=15000019&vT=1&hi=0&ov=0)
- 51) The same URL.
- 52) The same URL.
- 53) 峯近慶子「ジョヴァンニ・ディ・パオロ作《天地創造と楽園追放》—画像解釈の試み」『美学芸術学』第24号, 同志社大学文学部美学芸術学科, 2008, pp.77-78.
- 54) op. cit., [50]
- 55) 峯近, 前掲 [53], p.82.
- 56) 水之江有一『図像学事典—リーパとその系譜』岩崎美術社, 1991, p.288. では, 空気:赤, 火:黄, 土:黒, 水:白と整理される。
- 57) op. cit., [50]
- 58) 峯近, 前掲 [53], p.85.
- 59) 岡田匡史・静屋智・小野素子「第3回鑑賞教育プロジェクト—「ドイツ・ルネサンス版画名作展: デュッセルドルフ美術館所蔵—デューラーとその時代」(山口県立美術館)の題材化」『美術教育学』第17号, 1996, pp.69-79. 参照。
- 60) 直江俊雄「後期中等教育におけるアトライティング—エッセイコンテストの創設による運動展開」『美術教育学』第30号, 2009, pp.253-264. 参照。
- 61) 中央教育審議会答申, 前掲 [7], p.54.
- 62) 若桑, 前掲 [11], p.59.
- 〈附記〉本研究に当たり, 日本学術振興会の平成23年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C))「鑑賞教育における図像学的読解メソッドの研究」(課題番号23531179)の援助を受けた。

## **Appreciating Giovanni di Paolo’s “The Creation of the World and the Expulsion from Paradise (1445)” by Reading-Oriented Approach: A Suggestion of the Six-Stage Method of Art Appreciation**

Masashi OKADA  
Shinshu University

**Abstract:** In this paper, the author proposes “the Six-Stage Method of Art Appreciation” for painting as a way to realize his concept, “Reading-Oriented Art Appreciation.” It is designed for secondary-school students and consists of six parts: (1) observation and description, (2) visual analysis, (3) interpretation, (4) research, (5) reinterpretation, (6) judgment and evaluation. This idea is founded on Edmund Burke Feldman’s art criticism model organized by four steps. Selected piece for this method is *The Creation of the World and the Expulsion from Paradise* by Siene painter, Giovanni di Paolo who was active in the 15th century. Using this artwork and giving actual examples, he elucidates six stages. He hopes that the Six-Stage Method of Art Appreciation could be an effective response for an assignment, “improvement of language activity” shown as an important instructional point among all subjects in “Course of Study for Junior High Schools” revised in 2008.